

(3) 脊椎動物

1) 哺乳類

①概説

国際的にはIUCN、国内的には環境省によってレッドデータブック（RDB）が発行される中で、青森県でも2000年3月に「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－」を発行している。その中で哺乳類分野はEXランクに4種（ニホンオオカミ・ニホンカワウソ・ニホンイノシシ・ホンシュウジカ）、Aランクに4種（クロホオヒゲコウモリ・ホンドノレンコウモリ・モリアブラコウモリ・コヤマコウモリ）、Bランクに7種（フジホオヒゲコウモリ・カグヤコウモリ・ヤマコウモリ・ヒナコウモリ・ニホンウサギコウモリ・ユビナガコウモリ・テングコウモリ）、Cランクに6種（シナノミズラモグラ・ニホンコテングコウモリ・ホンドオコジョ・ホンドモモンガ・ニッコウムササビ・ヤマネ）、Dランクに1種（クロオオアブラコウモリ）、LPランクに4地域の集団（津軽山地のカワネズミ・南部地方のニホンイイズナ・下北半島のニホンツキノワグマ・下北半島のホンドザル）を選定している（和名一部変更）。

その後、自然環境の変化が進む中で青森県は指定種の見直し作業を行い、2006年3月に「青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）－」を発行した。この中で哺乳類分野はEXランクにニホンアシカを追加して合計5種に、ユビナガコウモリはCランクからBランクに変更し、LPランクに津軽半島のホンドザルを追加して合計5地域集団とした。ニホンアシカの追加は2000年度版では海棲哺乳類は対象外であったが、深浦町久六島は記録が残っている数少ない繁殖地の一つであること、繁殖生態から考えて上陸して出産していることが明らかのため評価したものである。ランクとしては繁殖記録がなくなってから50年以上経過しているのでEXランクとした。ユビナガコウモリのランク変更は既知生息地3か所の内、深浦町ガンガラ穴の個体数が現地調査によると激減状態であること、西目屋村津軽ダム建設予定地は本体着工による個体群維持が不安定になることからCランクからBランクに変更した。津軽半島のホンドザルは県内の生息地である下北半島や白神山地では比較的詳しい実態調査があるのに対して、津軽半島においては新しい科学的調査がほとんどないにもかかわらず一部地域では被害報告がでている。このように生息の事実がありながら現状把握がきわめて不十分であることからLPランクとした。

今回のRDB改訂版では2006年度版レッドリストをほぼ継承しているが、ニホンコテングコウモリについてはBランクからCランクに変更した。県内の記録ではいずれも個体数が少なく繁殖確認もないが、津軽地方、南部地方とも広範囲に生息確認場所が増えてきたことからランク変更が妥当と判断した。また、新規追加としてヒメヒナコウモリをDランクとした。これは2008年度日本哺乳類学会で本県が産地の一つとして発表されたことによる。しかし、全国的にも確認例が少なく、本県は本州で唯一の記録になることから評価できるだけの情報がないためにDランクとした。

指定種の選定においては定量的資料に基づく判定が求められているが、いずれの種についても県内全域にわたる満足できる定量的資料はいまだに整備されていないのが現実である。また、県内在来種が何種で外来種が何種かというような基本的資料もあいまいである。さらに、三方を海に囲まれている本県としては、今後海棲哺乳類全種についての評価を行う必要があるだろう。県内の哺乳類の生息状況は選定種の追加やランク変更にみられるように確実に変化している。今回のRDB改訂版を多くの県民の皆さんに関心を持っていただき、多くの目で郷土の自然環境を見守って行ければと考える。次回改訂時にはより多くの資料で、青森県の哺乳類の現状を正確に反映した改訂版になることを願っている。

（向山満・小原良孝）

②本文

ネコ目 イヌ科

EX

和名 ニホンオオカミ

環境省：絶滅

学名 *Canis lupus hodophilax* Temminck

[形態的特徴] 外形はイヌと似ているが、頭骨などで区別できる（阿部ら, 2005）。

[選定理由] 県内にも広く生息していたが1890年代にむつ市における射殺を最後に絶滅した（平田, 1985）とされる。

[分布と生態の概要] 全国的にも絶滅したとされるので分布していない。かつては、本県の陸上生態系の頂点にあって草食動物の個体数調節の地位にあった。

[特記事項] 本州固有亜種で、北海道産はエゾオオカミ *Canis lupus hattai* とされる。全国的に現存するニホンオオカミの標本は少ないが、十和田市正法寺には百数十年前に土地の猟師によって射殺されたとされる足の一部が残っている（吉行, 1989；読売新聞社, 1989）。

藩政時代の県内には南部藩でも津軽藩でもオオカミが各地に出没し、住民が苦勞した記録が残っている。普通種であったオオカミが明治時代になると狩猟の自由化や銃の性能がよくなったなどの理由で簡単に駆除できるようになって絶滅したものと考えられる。（向山満）

ネコ目 イタチ科

EX

和名 ニホンカワウソ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Lutra lutra nippon* Imaizumi et Yoshiyuki

[形態的特徴] 他のイタチ科動物と似ているが、全長1mを越える大型であること、指の間に水かきがあること、尾が太くて円錐形であることなどから区別できる（阿部ら, 2005）。

[選定理由] 県内各地に残るカッパ伝説（青森県, 1998a, 1998b；広瀬, 1999）のモデルは本種であって、かつては県内に広く生息していたと考えられる。青森県（1981）によると、1900～1980年代まで県内でカワウソを見たという人がいる。また、音喜多（1975）は年代がはっきりしないが、湊町の古谷福蔵（当時86才）が新井田川で6、7才頃（明治時代）にはカワウソを見かけたことを述べている。

[分布と生態の概要] 絶滅種であって本県には分布しない。かつては、河川・湖沼・沿岸部で水生動物を捕食していたと考えられる。

[特記事項] 本州以南固有亜種である。比較的新しい目撃情報は養殖ミンクの逃亡個体、もしくは、その野生化個体の可能性が高い。（向山満）

アザラシ目 アシカ科

EX

和名 ニホンアシカ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Zalophus japonicus* (Peters)

[形態的特徴] 前後肢とも指がくっついてひれ状に変化して潜水・遊泳に適応した形態である。

雄は体長2.4m、体重は500kgにもなる大型獣であるが雌は小さい。

[選定理由] 阿部（2002）や伊藤（1997）によると久六島は日本の中で数少ない生息地として報告されているが、すでに50年以上生息確認されていない。

[分布と生態の概要] 絶滅種であって本県には分布しない。久六島は繁殖地であったとされるが繁殖様式の詳細については記録が残っていない。島根県竹島などでは4～7月に集団で繁殖し、その後は回遊していたという（阿部ら, 2005）。

[特記事項] 本県の自然誌全般に詳しい記録を残している和田（1939）は久六島をトドの生息地としているが、ニホンアシカについては触れていない。したがって、さらに資料点検が求められるが、向山（2007）は他の資料を総合して久六島が繁殖地であったことは確実であろうとしている。また、県外では比較的新しい目撃例があることから今後も注意が必要である。（向山満）

ウシ目 イノシシ科**EX**

和名 ニホンイノシシ

環境省：該当なし

学名 *Sus scrofa leucomystax* Temminck

[形態的特徴] 全身褐色または暗黒色の剛毛で被われ、鼻の先端は円盤状となる（阿部ら, 2005）。

[選定理由] 古文書などの記録からかつて県内に生息していたことは確実であって（青森県, 1980）、平田（1985）によると1880年頃の東通村における捕獲を最後に絶滅したとされる。

[分布と生態の概要] 絶滅種であって本県には分布しない。自然分布の北限は福島県である。

[特記事項] 日本固有亜種であるが、日本哺乳類学会（1997）では普通種となっている。かつては本県が北限であった。青森県（1998b）によると明治時代初めまでは生き残っていたと考えられる。雑食性で農業上の被害が甚大であったとされる。

県内分布の新しい記録として、環境庁（1993）では分布が確認された（1989年時点）県となっていて、さらに、環境庁自然保護局（1993）によると県内から8メッシュの報告がある。しかし、現在の青森県で野生繁殖している個体群の残存は考えにくく、いずれの情報も飼育個体逸出の目撃か情報収集の間違いと思われる。

（向山満）

ウシ目 シカ科**EX**

和名 ホンシュウジカ

環境省：該当なし

学名 *Cervus nippon nippon* Temminck

[形態的特徴] 大型獣で雌は雄より小さい。雄は大きな角を持つが毎年生えかわる（阿部ら, 1994）。

[選定理由] 古文書などの記録からかつて県内に生息していたことは確実で、1907年（明治40年）頃まで下北半島北東部には生息していた（青森県, 1978）。県内では1910年代に絶滅した（青森県, 1981）とされる。

[分布と生態の概要] 絶滅種であって本県には分布しない。自然分布の北限は岩手県である。

[特記事項] 日本固有亜種で本州・四国・九州に分布する（環境庁, 1993）。県内分布に関する新しい記録として、環境庁（1993）では絶滅した県となっているが、環境庁自然保護局（1993）によると本県から14メッシュの報告がある。1992年11月に八戸市田面木字南ノ沢で雄1頭の死体が回収されて、八戸市児童科学館に剥製として展示されている（古館, 1992）。その後も野外での目撃情報や写真記録があるが、野生繁殖している個体群の存在は考えにくい。飼育個体の逸出か県外からの迷行、もしくは情報収集の間違いであると考えられる。

（向山満）

コウモリ目 ヒナコウモリ科**A**

和名 クロホオヒゲコウモリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Myotis pruinus* Yoshiyuki

[形態的特徴] 前腕長31mm前後、体重4g前後の小型種で、黒い体毛に先端が銀色の差し毛が目立つ。

[選定理由] 県内からは田子町・新郷村・七戸町・むつ市・外ヶ浜町・西目屋村・深浦町から記録されているが、いずれの地点も個体数が少なく繁殖確認がない。生息環境は自然度の高い広葉樹林であって、今後の生息環境悪化が懸念される。

[分布と生態の概要] 広葉樹林を周年の生息地とし、樹洞を日中のねぐらや冬眠・出産保育場所とする森林性コウモリと推測されるがこうした生態的知見は得られていない。他県の観察では橋下のスリットや洞穴内のねぐら利用観察例がある。

[特記事項] 日本固有種であり、日本哺乳類学会（1997）では危急種としている。七戸町の生息確認地点では最近（2008年、2009年）は確認されなくなった。小型種で飛翔能力が低いと推測されることから生息樹林の面積減少や分断化は個体群の維持に直接大きな影響を与えらると思われる。（向山満）

コウモリ目 ヒナコウモリ科**A**

和名 ホンドノレンコウモリ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Myotis nattereri bombinus* Thomas

[形態的特徴] 前腕長40mm前後、体重7g前後の小型種で、暗褐色の体毛で被われている。腿間膜の後縁に細毛を列生する。大きな耳介と、細長く尖った耳珠を持つことが特徴である。

[選定理由] 三戸町・八戸市・六戸町・十和田市・むつ市・西目屋村・鱒ヶ沢町・深浦町から記録されているが繁殖地点をのぞくと確認頭数はほぼ1頭ずつである。繁殖地点と周辺の樹林減少が進んでいる。

[分布と生態の概要] 六戸町熊野神社奥の院に毎年100頭くらいの雌が集まって出産保育繁殖集団を形成する。1産1子である。雄や越冬場所に関する生態的知見は得られていない。ラジオテレメトリー調査によると繁殖場所からの移動距離は約1.3km～5.0kmで、利用環境は樹林や林縁部を好み、畑や水田上などの開けた空間でないことが分かった（向山ら、2007）。

[特記事項] 全国的に希少種で、記録がある都道府県は15しかない（阿部ら、2005）。飛翔範囲が樹林内に限られ、行動圏が狭いことから連続する広い樹林の保全が大切である。（向山満）

コウモリ目 ヒナコウモリ科**A**

和名 モリアブラコウモリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Pipistrellus endoi* Imaizumi

[形態的特徴] 前腕長32mm前後、体重7g前後の小型種で、市街地の民家などに生息するアブラコウモリに酷似するが上顎の犬歯が細く、後側の突起が大きい。

[選定理由] 県内の既知確認場所は三戸町・むつ市・鱒ヶ沢町の3地点しかない。三戸町の生息地は現在は消失し、むつ市の既知生息地（町田ら、1986）はその後の調査で確認されていない。

[分布と生態の概要] 良好な天然林を生息場所としている典型的な森林性コウモリであるが、採餌・休息・繁殖・冬眠などの詳しい生態は分かっていない。向山（1988）による三戸町の記録では伐採したブナの太い横枝にあった樹洞から数十頭の本種が飛び出している。飛翔できない幼獣が混じっていたことから繁殖集団であったと推定される。森林の樹洞を利用していることは確実であるが、その詳しい生態については不明である。

[特記事項] 日本固有種で本州と四国から知られている。日本哺乳類学会（1997）では危急種としている。飛翔力の弱い小型種であることから広い樹林の保全が大切である。（向山満）

和名 コヤマコウモリ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Nyctalus furvus* Imaizumi et Yoshiyuki

【形態的特徴】 前腕長50mm前後、体重20g前後で暗褐色で長い体毛が密生している。

【選定理由】 新郷村（向山, 1989a, 1989b）と鱒ヶ沢町（向山, 2004a）の2か所しか記録がない希少種である。このうち新郷村の生息地である迷ヶ岱のブナ林は狭く、個体群維持が懸念される。

【分布と生態の概要】 全国的にも希少種で県外の記録は岩手県・福島県・長野県の3県しかない（山本ら, 2008）。県内の既知産地はいずれも良好なブナ林であることから典型的な森林性コウモリと思われるが、越冬や採餌・繁殖に関する生態的知見はない。

【特記事項】 中国・台湾にも生息する。日本哺乳類学会（1997）では危急種としている。本種の生息地である原生林的な広葉樹林の伐採は、繁殖・休息・冬眠などに使っていると推測される樹洞消失を伴うことから直接的脅威となる。本州産の森林性コウモリとしては中型種であることから、広大な面積の自然林でないと餌の昆虫を恒常的に供給できないと思われる。したがって、周辺部の伐採も脅威となりうる。個体数が少ないことから早急に県内分布の精査が必要である。

（向山満）

コウモリ目 ヒナコウモリ科**B**

和名 フジホオヒゲコウモリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Myotis fujiensis* Imaizumi

【形態的特徴】 前腕長33mm前後、体重6g前後の小型種である。金属光沢のある黒褐色の長い体毛で被われている。飛翔初めの当歳獣と成獣、換毛時期による色彩変異の幅が広い。

【選定理由】 近年は津軽地方、南部地方とも広く確認されるようになったが、どこでも森林に限られ、個体数は少ない。小型で飛翔力が弱い種であることから森林面積の減少、分断化などが進むと本種の個体群維持が懸念される。

【分布と生態の概要】 県内においては捕獲事例があるだけで行動圏・ねぐら・越冬状況などの生態的知見はほとんど得られていない。8、9月の捕獲個体には明瞭な授乳痕がある雌と関節の骨化が不十分な当歳獣が混じるので、森林内における繁殖が推測される。

【特記事項】 日本固有種であるが、ヒメホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi* の本州東部産亜種とする考えもある。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。本県において、かつてシナノホオヒゲコウモリ *Myotis hosonoi* と同定されていたコウモリは本種に該当すると考えられる。

(向山満)

コウモリ目 ヒナコウモリ科**B**

和名 カグヤコウモリ

環境省：該当なし

学名 *Myotis frater kaguyae* Imaizumi

【形態的特徴】 前腕長37mm前後、体重8g前後の小型種で、黒褐色の体毛でフジホオヒゲコウモリに似ているが、やや大型で下腿長が長く18mmを越える。

【選定理由】 県内各地の森林で捕獲事例があるが、近年の記録は少なく、また、個体数はフジホオヒゲコウモリより少ない。小型で飛翔力が弱い種であることから森林面積の減少、分断化が進むと個体群維持が懸念される。

【分布と生態の概要】 県内におけるねぐらや繁殖に関する生態的知見はない。県外においては森林以外に洞穴や家屋の利用例もある（阿部ら, 2005）。

【特記事項】 日本固有亜種で本州と北海道から知られている。もともとは青森県南津軽郡竹館村葛川（現平川市）の竹林から採集された個体について新種記載された（Imaizumi, 1956）ことからカグヤコウモリと命名されている。哺乳類の中で本県が基産地となっている数少ない例である。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。

(向山満)

コウモリ目 ヒナコウモリ科**B**

和名 ヤマコウモリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Nyctalus aviator* Thomas

【形態的特徴】 前腕長60mm前後、体重40g前後の大型種で、光沢のある明るい茶色の長毛が密生していて美しい。

【選定理由】 全国的な分布を見ると北海道から九州まで広く記録があるが、この30年間に限ると激減傾向にあるという（阿部ら, 2005）。県内では弘前市弘前公園・八戸市長者山の生息樹洞は消失し、他の既知繁殖コロニーでも個体数が減少している。

【分布と生態の概要】 白神山地ではクマガラの掘った樹洞を利用している。八戸市長者山ではアカゲラの掘った穴を利用していた。他には腐朽進行でつくられた樹洞利用例もある。東北町のケヤキ樹洞では出産期まではヒナコウモリと供用している。下北半島では確認が1例しかない。

【特記事項】 本県産コウモリ類の中で最大種である。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。他の森林性コウモリも同様であるが、自力で穴を掘れないので樹洞確保が大切である。また、八戸市櫛引八幡宮ではミツバチに殺されて樹洞を乗っ取られた例がある。

(向山満)

コウモリ目 ヒナコウモリ科**B**

和名 ヒナコウモリ

環境省：該当なし

学名 *Vespertilio sinensis* (Peters)

[形態的特徴] 前腕長48mm前後、体重20g前後の中型種で暗褐色の体毛に白っぽい長毛が混じって霜降り状に見える。しかし、夏季には明るい茶色の体毛に変わり、抜け替わって秋にはまた霜降り状になる。

[選定理由] 県内の繁殖集団は橋梁の隙間に形成されることが多いが、弘前市境橋・八戸市尻内橋においては架け替えで消失している。建物につくられる繁殖集団は建て替えや糞尿の衛生問題で追い出されることが多く長期的にみると安定していない。

[分布と生態の概要] 北海道から九州まで記録があるが、繁殖確認は少ない。県内では南部地方に多く、春に妊娠雌が集まって繁殖集団を形成し、2子を出産する。県内では通常は越冬しない。

[特記事項] 日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。七戸町天間館神社では本種の繁殖集団による拝殿汚染に苦しんできたが、30年ほど前に蝙蝠小舎建設と移住で世界的にも模範となる共生に成功している。八戸市尻内橋や東北町広沼大明神ではバットボックスで繁殖している。

(向山満)

コウモリ目 ヒナコウモリ科**B**

和名 ニホンウサギコウモリ

環境省：該当なし

学名 *Plecotus auritus sacrimontis* G. Allen

[形態的特徴] 前腕長40mm前後、体重8g前後の小型種で、灰褐色の体毛で被われるが腹面は白っぽくなる。ウサギの耳を連想させる大きく長い耳介が特徴である。

[選定理由] 県内では比較的広範囲に記録があるが、繁殖確認場所は少ない。本来は樹洞を住み家とする森林性コウモリと考えられるが、人家を利用することもあって、多くの場合は騒音や糞尿汚染で追い出されることが多い。

[分布と生態の概要] 県内の記録としては三戸町・田子町・新郷村・七戸町・十和田市・青森市・西目屋村・鱒ヶ沢町などがある。夏季には山間のトイレの天井を休息に使っていることがある。

[特記事項] 日本固有の亜種で北海道・本州・四国にかけて広く記録されているが、西日本ではとても珍しい。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。七戸町の繁殖集団におけるラジオテレメトリー調査によると、繁殖場所からの移動距離は約0.1km～2.9kmしかなく、樹林内を選択して行動していることが分かっている（向山ら, 2007）。

(向山満)

コウモリ目 ヒナコウモリ科**B**

和名 ユピナガコウモリ

環境省：該当なし

学名 *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson)

[形態的特徴] 前腕長47mm前後、体重13g前後の小型種で、黒っぽい焦げ茶色の体毛で被われている。翼は高速長距離飛翔タイプで細長い。

[選定理由] 県内の集団生息地としては西目屋村津軽ダム建設予定地、深浦町北金ヶ沢の廃坑とガンガラ穴の3か所しかない。生息地として古くから知られていた深浦町ガンガラ穴では、近年の調査によると激減傾向である（向山, 2004b）。繁殖確認は深浦町以外にない。

[分布と生態の概要] 本州から九州まで広く分布しているが、本県は北限になる。全国的に生息地では大集団を形成している。県内の集団生息地は津軽地方に限られ、南部地方からは1頭が保護された記録以外にない。

[特記事項] 国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所は本体着工で消失する本種の生息地の代替として人工洞窟のコウモリボックスを設置し、2009年1月に集団移転を行った。本種の大規模な保全対策として世界的にも注目される（津軽ダム工事事務所, 2009）。

(向山満)

和名 テングコウモリ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Murina hilgendorfi* (Peters)

【形態的特徴】 前腕長43mm前後、体重12g前後で、灰褐色の体毛で被われている。長い差し毛の先端が金属光沢のある銀色で美しい。腿間膜の上面全体も長い毛で被われ、後縁にも長い毛があるので全身毛深く見える。第1指が長大が目立つ。

【選定理由】 津軽地方、南部地方とも記録されているが、個体数が少なく繁殖確認などの生態的知見はない。三戸地方の洞穴では冬眠個体数の変化から減少傾向が報告されている（工藤ら、1999）。他地区も同様な傾向と思われる。

【分布と生態の概要】 捕獲事例はあるが多くは洞穴内の冬眠事例で活動期の記録は少ない。また、個体数が少なく繁殖状況などは不明である。ネズミ類調査などに使われる墜落缶内で見つかることがときどきあることから地上採餌の可能性が推測されている。

【特記事項】 日本固有種で、日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。鼻孔が長く突出していることから命名されているが、ニホンコテングコウモリほど突き出していない。

(向山満)

モグラ目 モグラ科**C**

和名 シナノミズラモグラ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Euroscaptor mizura ohtai* (Imaizumi)

ミズラモグラは頭胴長10cm前後の小型のモグラで、青森県から広島県までの本州にのみ分布する。モグラ類の中では最も原始的といわれる（今泉, 1960）。青森県産のミズラモグラは亜種シナノミズラモグラで（阿部ら, 1994；環境庁, 1993）、その生息域は局在的で個体数も多くはない。青森県では八甲田大岳や南八甲田駒ヶ峯・同乗鞍岳・雲谷峠・岩木山の他、田子町大黒森や小国牧場・新郷村迷ヶ平・旧平賀町などで10数例捕獲されているのみ（今泉, 1960；阿部・小林, 1968；向山, 1981；関, 1992；奈良ら, 1993；笹森, 1994；小原, 2004）で、繁殖習性など詳しい生態はよくわかっていない。生息域が飛地のように分断されていることから、環境依存性が強い種であると判断される。

(小原良孝)

コウモリ目 ヒナコウモリ科**C**

和名 ニホンコテングコウモリ

環境省：該当なし

学名 *Murina silvatica* Yoshiyuki

前腕長30mm前後、体重5g前後の小型種で、明るい茶色の長い体毛が全身に生えている。腿間膜の上面と後縁に長い毛がある。鼻孔が長く管状に両側に突出する。日本固有種で北海道から九州まで記録されているが西日本では珍しい。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。

県内では調査が進むにしたがって、津軽地方・南部地方とも広範囲に記録され、以前考えられていたほど珍しい種でなくなったが、新しい確認は少なく個体数も多くない。繁殖確認などの基本的生態知見もない。本来は森林性コウモリと考えられるが、夏から秋にかけてはオオイタドリ・クズ・アキタフキなどの枯葉内をねぐらとしている例が見つまっている。

(向山満)

ネコ目 イタチ科**C**

和名 ホンドオコジョ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Mustela erminea nippon* Cabrera

近縁種であるイイズナとよく似ているが、尾が5cm前後で、イイズナより2倍半ほど長い。夏毛は背面が濃い褐色、腹面は白色で、尾は先端ほぼ1/3が黒毛である。冬になると尾の先端部の黒毛を残し全身純白となる。本州中部以北の高山帯に生息する日本固有亜種とされ、青森県が北限である。県内では津軽山地や恐山山地、浪岡や板留などでも記録があり（和田, 1937；下泉, 1970）、低山帯にも生息していることは確かである。しかし、標本として残っている記録は八甲田十和田山地、白神山地および岩木山の亜高山帯・高山帯での数例のみである（Obara, 1985；笹森, 2007）。全県的に捕獲の記録が少ないので、本来的に生息密度の低い希少な種と判断される。

(小原良孝)

ネズミ目 リス科**C**

和名 ホンドモモンガ

環境省：該当なし

学名 *Pteromys momonga* Temminck

頭胴長14~20cmの中型樹上棲哺乳類。背面灰褐色ないしは黒褐色、腹面白色の体毛を有し、目の周りは黒褐色の毛で縁どられている。青森県を分布北限とする日本固有種で、前肢と後肢の間に張った飛膜で木々の間を滑空する。県内では八甲田十和田山地や白神山地をはじめ、津軽山地や恐山山地など、樹種の豊かな広葉樹林や針広混交林に生息している。しかし、これらの森林地域でも生息情報は必ずしも多くはない。本種は全県的に減少傾向にあり（青森県, 1980）、特に県東部の山地部や丘陵帯、相馬・弘前・大鰐を中心とする西部山地周辺部での生息情報が少ない（青森県, 1989）。捕獲の記録・確実な生息情報は全県的に少なく、希少な種と判断される。

(小原良孝)

ネズミ目 リス科**C**

和名 ニッコウムササビ

環境省：該当なし

学名 *Petaurista leucogenys nikkonis* Thomas

頭胴長27～49cm、尾長28～41cmの本邦産リス科としては最も大きい種で、首から前肢・後肢・尾の間に飛膜があり、木から木へと滑空する。ムササビは本州・四国・九州に分布する日本固有種で、青森県産はその亜種とされている。平地から亜高山帯にかけ杉林・ヒバ林・ブナ林など針葉・広葉・針広混交を問わず広く生息する（青森県, 1989）。樹上生活を主とし、大木の樹洞内に巣を造り、薄暮から夜間にかけて活動する。県内では名久井岳の法光寺・十和田湖神社などの社寺林や岩木山麓・梵珠山など全県的な分布を示すが（押田私信, 2008）、ヤマネやホンドモモンガと同様、減少傾向にあり、特に下北半島頸部や津軽地方の平地部の林地などでは生息情報が少なくなっている。

(小原良孝)

ネズミ目 ヤマネ科**C**

和名 ヤマネ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Glirulus japonicus* (Schinz)

頭胴長が7～8cmで、体形的にはネズミと似ているが、5cm前後の尾には2cmほどの長い毛が生えネズミとは異なるふさふさした尾を持つ。背面中央に走る黒い線が特徴的である。1属1種の日本固有種で、冬眠するネズミ目哺乳類として国の天然記念物に指定されている。本州・九州・四国・隠岐島後へのみ分布し、低山帯から亜高山帯の森林に生息する（阿部ら, 1994）。県内では下北・津軽両半島を含め自然林のあるところ全域的に分布しているが、津軽地方の平地部や下北半島頸部・南部地方の平地部などの林では生息情報が極めて少ない。森林伐採などでその生息環境が脅かされており、全県的に減少の方向にある。日本哺乳類学会（1997）では危急種とされている。

(小原良孝)

コウモリ目 ヒナコウモリ科

D

和名 クロオオアブラコウモリ

学名 *Pipistrellus savii velox* (Ognev)

環境省：情報不足

現在までに北海道から2頭、県内では青森市から1頭（吉行, 1974；吉行・木村, 1975）と黒石市から1頭（向山, 1996）ずつが確認されているだけの希少種で、評価に必要な知見が少ない。サイズがやや大きい、外観は津軽地方に多いアブラコウモリに似る。

黒石市の確認例は校舎内における死体拾得であり、比較的新しい記録であることから今後の精査が必要である。日本哺乳類学会（1997）では不能種としている。

（向山満）

コウモリ目 ヒナコウモリ科

D

和名 ヒメヒナコウモリ

学名 *Vespertilio murinus* Linnaeus

環境省：情報不足

日本では2002年に北海道礼文島から初記録された希少種である（Sato & Maeda, 2003）。青森県からは2005年に発見された（河合ら, 2008）。河合私信（2008）によると採集場所は外ヶ浜町三厩で12月27日である。

北海道と青森県以外にはまだ記録がない。南部地方には比較的多いヒナコウモリと良く似ているがいくぶんサイズが小さい。何らかの原因で大陸から迷い込んだとの見方がある。今後の精査が必要である。

（向山満）

モグラ目 トガリネズミ科**LP (津軽山地)**

和名 カワネズミ

環境省：該当なし

学名 *Chimarrogale platycephala* (Temminck)

[形態的特徴] 頭胴長10～13cm、尾長10cm前後のトガリネズミ亜科食虫類で、手足の指の両側に生えている水かきに適した剛毛の列、耳栓の働きをする対珠など、水中生活に適した諸特徴をもつ。

[選定理由] 県内では白神山地、八甲田十和田山地、恐山山地など懐の深い原生的な自然林を有する山地では、カワネズミの生息数は比較的豊富である。しかし、津軽山地ではカワネズミの生息に適した自然度の高い溪流が少なく、捕獲記録も少ないためこの地域での絶滅が危ぶまれる。

[分布と生態の概要] カワネズミは本州と九州にのみ分布する日本固有種で、主に山地溪流沿いに生息している。西日本では絶滅を危惧する県が多く、東日本では普通種とする県が多い。県内では1930年代頃までは平野部の小川にも生息していた記録(和田, 1937)があるが、現在は山地溪流に限られ、平野部の河川での生息の可能性はほとんどない(小原, 1993, 1995, 1996, 1999, 2008)。県内では下北郡大間町の奥戸川および同風間浦村の易国間川での記録が最北限である。

[特記事項] 青森県が分布の北限である。日本哺乳類学会(1997)では普通種とされている。

(小原良孝)

サル目 オナガザル科**LP (下北半島)**

和名 ホンドザル

環境省：該当なし

学名 *Macaca fuscata fuscata* Blyth

[形態的特徴] 頭胴長は雄53～60cm、雌47～55cmで雄の方がやや大きい。尾は数cm程度で短い。体毛は茶褐色ないし灰褐色で、腹部と前肢・後肢の内側はやや白く、顔と尻部は裸出して赤い。

[選定理由] 1960年代で150～200頭とされていた下北半島のホンドザル集団は年々増加し、2007年には1,645頭にまで増えている。また、下北半島頸部で飼育されていたタイワンザル(*Macaca cyclopis*)の逃亡個体との交雑も危惧されている。現在のところこれら両種のサルが接触したという情報はない(磯山, 1999)が、下北半島のホンドザルに関しては、特に他種との交雑による遺伝子移入等の遺伝学的観点より、留意すべき地域個体群として注目していく必要がある。

[分布と生態の概要] 下北半島のホンドザルの生息域はもともと半島西部に限られていたが、個体数が増加するにつれ次第に東進する傾向にあり、むつ市近辺にまで出没するようになっている。

[特記事項] 下北半島の集団は世界最北端の猿として国の天然記念物に指定されている。環境省のレッドリスト見直し(2007)で、LP(絶滅のおそれのある地域個体群)からはずれた。

(小原良孝)

サル目 オナガザル科**LP (津軽半島)**

和名 ホンドザル

環境省：該当なし

学名 *Macaca fuscata fuscata* Blyth

[形態的特徴] 頭胴長は雄53～60cm、雌47～55cmで雄の方がやや大きい。尾は数cm程度で短い。体毛は茶褐色ないし灰褐色で、腹部と前肢・後肢の内側はやや白く、顔と尻部は裸出して赤い。

[選定理由] 津軽半島のホンドザルの生息数は1960年代には220～280頭であった(東, 1966)。その後生息数についての詳しい調査はほとんどなされていない。最近行った青森県の調査では22群528頭+ハナレザル6頭と推定されている(青森県, 2009)が、群れの構成、繁殖実態などなお不明な点が多い。現時点では、農作物被害や人的被害など地域住民との軋轢はあまり大きくはないが、下北半島のホンドザルのような深刻な状況にならないよう早い時点での適正な対策が望まれる。

[分布と生態の概要] 津軽半島のホンドザルはもともと半島中央部の大倉岳以北に限られていた(東, 1966)が、現在は梵珠山・県民の森あたりでも頻繁に見かけられ、生息域が南へ広がる傾向にある。また、半島沿岸部や津軽平野の山里への出没も多くなっている(青森県, 2008, 2009)。

[特記事項] 青森県レッドリスト(2006)でLP(津軽半島)に追加指定された。(小原良孝)

和名 ニホンイイズナ

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（本州）

学名 *Mustela nivalis namiyei* Kuroda

[形態的特徴] 頭胴長は雄で18cm前後、雌で15cm前後。短足胴長のスマートな体型で、オコジョによく似ているが、尾が短く、オコジョにみられる尾端の黒毛がないので容易に区別される。夏期には背面茶褐色、腹面白色の体毛をもち、冬になると換毛し全身純白となる。

[選定理由] ニホンイイズナは、環境省のレッドリスト見直し（2007）で、準絶滅危惧（NT）から絶滅のおそれのある地域個体群（LP）に変更された。県内では、地域による生息密度の片寄りが見られ、津軽地域では比較的生息情報が多いが、青森県東部、特に南部地方では1970年以後記録がなく（小原ら, 1997）、この地域での絶滅が危ぶまれる。

[分布と生態の概要] ニホンイイズナはユーラシア及び北アメリカ北部に広く分布するイイズナ（*M. nivalis*）の日本固有亜種でその主な生息域は北海道と北東北とされている（阿部ら, 1994）。

[特記事項] 北海道産（2n=42）と青森県産（2n=38）は染色体数も核型も大きく異なり、頭骨形態にも違いが見られることから、両者は互いに異なる亜種の可能性がある（小原, 1991, 2000）。

（小原良孝）

和名 ニホンツキノワグマ

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（下北半島）

学名 *Ursus thibetanus japonicus* (Schlegel)

[形態的特徴] 頭胴長は、雄114～143cm、雌119～123cmで、雄の方が大きい。全身黒い体毛で被われているが、胸に白い“三日月模様”があり、この“三日月模様”が本種の名前の由来となっている。しかし、“三日月模様”の大きさは個体や集団によって幅広い変異があり、無紋の個体もある。

[選定理由] 下北半島の集団は、その生息域が八甲田十和田山系から分断され遺伝的に孤立した集団となっており、個体数が減少し多くても100頭レベル以下と推定され（青森県, 1997）、また最近3年間の有害捕獲個体が103個体にも達し、遺伝的多様性の低下が一層危惧される。

[分布と生態の概要] ツキノワグマ（*Ursus thibetanus*）はアジア地域に分布しており、日本産はその一亜種とされている（環境省, 2002）。県内では、下北半島および岩木山・白神山系とこれにつながる十和田山地がその生息域となっている（青森県, 1981）。

[特記事項] 本州北限の個体群であり、白神山系の個体群と比べ、“三日月”の白斑が大きい個体が多く、無紋の個体はまれである（青森県, 1990）。

（小原良孝）

③引用文献

- 阿部 永 2002. ニホンアシカ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブック哺乳類. 環境省編. pp. 46-47.
- 阿部 永・小林恒明 1968. 八甲田地域における小哺乳類の調査結果. JIBP主調査地八甲田山地の動物調査報告. pp. 5-15.
- 阿部 永・石井信夫・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会, 東京. 195pp.
- 阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明 2005. 日本の哺乳類 [改訂版]. 東海大学出版会, 秦野市. 206pp.
- 青森県 1978. 第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(哺乳類). 47pp.
- 青森県 1980. 青森県の鳥獣. 181pp.
- 青森県 1981. 青森県鳥獣生息状況調査報告書(哺乳類). 131pp.
- 青森県 1989. 市町村別鳥獣生息状況調査報告書. 161pp.
- 青森県 1990. ツキノワグマ生息状況調査報告書. 55pp.
- 青森県 1997. 平成8年度下北半島ツキノワグマ生息調査報告書. 95pp.
- 青森県 1998a. 青森県史叢書奥南新報「村の話」集成上. 青森県環境生活部県史編さん室. 284pp.
- 青森県 1998b. 青森県史叢書奥南新報「村の話」集成下. 青森県環境生活部県史編さん室. 265pp.
- 青森県 2006. 青森県の希少な野生生物 -青森県レッドリスト(2006年 改訂増補版)-. 113pp.
- 青森県 2008. 平成19年度 津軽半島地域ニホンザル生息数等調査報告書. 21pp.
- 青森県 2009. 津軽半島地域ニホンザル生息数等調査報告書(2007~2008年). 46pp.
- 東 滋 1966. 青森県のニホンザルの分布・津軽半島東部. 野猿, 25: 22-29.
- 古館光治 1992. 青森県でのシカ発見の顛末. 青森県生物学会八戸支部会報, 36: 2-3.
- 平田貞雄 1985. 青森県の動物たち-哺乳類の話-. 東奥日報社, 青森市. 150pp.
- 広瀬 伸 1999. 水虎様への旅-農業土木文化の時空. 青森県農林部農村計画課. 222pp.
- Imaizumi, Y. 1956. A new species of *Myotis* from Japan (Chiroptera). Bull. Nat. Sci. Mus., 3(1): 42-48.
- 今泉吉典 1960. 原色日本哺乳類図鑑. 保育社, 大阪. 196pp.
- 磯山隆幸 1999. 生息環境. 下北半島ニホンザル生息数等調査報告書. 青森県. pp. 4-8.
- 伊藤徹魯 1997. クロアシカ ニホンアシカ. レッドデータ日本の哺乳類. 日本哺乳類学会編. pp. 118-119.
- 環境庁 1993. 日本産野生生物目録-本邦産野生動植物の種の現状-脊椎動物編. 80pp.
- 環境庁自然保護局 1993. 第4回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書(哺乳類). 208pp.
- 環境省 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック- 1 哺乳類. 177pp.
- 環境省 2007. 哺乳類, 汽水・淡水魚類, 昆虫類, 貝類, 植物I及び植物IIのレッドリストの見直しについて. (2007年8月3日公表)
- 河合久仁子・福井 大・佐藤雅彦・原田正史・前田喜四雄 2008. 日本列島におけるヒメヒナコウモリ *Vespertilio murinus* Linnaeus, 1758の発見. プログラム・講演要旨集. 日本哺乳類学会. p. 83.
- 工藤雅典・貝守幸悦・大久保秀映・沖田和真・沖田浩一 1999. コウモリ類の冬眠状況からみた青森県三戸地方の自然度の低下. 第42回日本学生科学賞作品集. pp. 94-95.
- 町田和彦・斎藤 貴・大八木昭・井上茂樹・斎藤 健 1986. 青森県恐山の森林棲翼手類相(1). 哺乳動物学雑誌, 11(3/4): 173-181.
- 向山 満 1981. 三戸地方の食虫類. 青森県生物学会誌, 19: 15-21.
- 向山 満 1988. 青森県産翼手目の分布. 青森県立三戸高等学校研究紀要, 18: 20-27.
- 向山 満 1989a. 青森県初記録の翼手目2種. PAULOWNIA, 21: 112.
- 向山 満 1989b. 青森県産翼手目の検討. 青森県生物学会誌, 26: 36.
- 向山 満 1996. 青森県2頭目のクロオオアブラコウモリ. 青森自然誌研究, 1: 34.
- 向山 満 2004a. 白神山地モニタリング調査手法確立のための調査(コウモリ類・両生類・爬虫類). 白神山地世界遺産地域の森林生態系保全のためのモニタリング手法の確立と外縁部の森林利用との調和を図るための森林管理に関する研究報告書(平成10~14年度). 環境省自然環境局東北地区自然保護事務所. pp. 134-139.
- 向山 満 2004b. 青森県岩崎村ガンガラ穴のコウモリ類. 青森自然誌研究, 9: 18.
- 向山 満 2007. ニホンアシカ絶滅の経緯. 希少野生生物保護・保全対策報告書-青森県の希少野生生物の生息状況と保護・保全活動の事例-. 青森県. pp. 17-19.
- 向山 満・鶴間亮一・麻田昌克・真木伸隆・鬼久保浩正・佐藤利奈 2007. 繁殖期におけるノレンコウモリとウサギコウモリの行動圏と利用環境. 日本哺乳類学会2007年度大会プログラム・講演要旨集. p. 151.
- 奈良典明・小原良孝・向山 満 1993. 南八甲田山地の哺乳類相. 南八甲田山地総合学術調査報告書. 青森県環境保健部. pp. 81-94.
- 日本哺乳類学会 1997. レッドデータ日本の哺乳類. 文一総合出版, 東京. 279pp.
- Obara, Y. 1985. G-band homology and C-band variation in the Japanese mustelids, *Mustela erminea nippon* and *M. sibirica itatsi*. Genetica, 68: 59-64.
- 小原良孝 1991. 進化と核型. 現代の哺乳類学(朝日稔・川道武男編). 朝倉書店, 東京. pp. 23-44.
- 小原良孝 1993. 白神のけものと小動物たち. 白神山地(牧田肇監修). 青森銀行, 青森. p. 111.
- 小原良孝 1995. 白神山地の食虫類・ネズミ類. 白神山地自然環境保全地域総合調査報告書. 国立公園協会, 東京. pp. 309-323.
- 小原良孝 1996. 八甲田・十和田の哺乳類と両生類. 八甲田・十和田(牧田肇監修). 青森銀行, 青森. p. 154.
- 小原良孝 1999. 青森県におけるカワネズミの分布状況. 哺乳類科学, 39(2): 299-306.

- 小原良孝 2000. イイズナ. 青森県の希少な野生生物 -青森県レッドデータブック-. 青森県. p. 118.
- 小原良孝 2004. 白神山地の自然, IV 動物, 2 哺乳類. 青森県. pp. 49-65.
- 小原良孝 2008. 白神山地の溪流を自在に泳ぐカワネズミたち. 白神山地の魅力, 弘前大学農学生命科学部附属白神山地有用資源研究センター. pp. 10-17.
- 小原良孝・笹森耕二・向山 満 1997. 青森県におけるイイズナの生息記録と分布状況. 哺乳類科学, 37(1): 81-85.
- 音喜多富寿 1975. 南部くらし今昔. 北の街社. 青森市. 304pp.
- 笹森耕二 1994. 青森市雲谷周辺の自然. 青森市基幹公園ビジョン調査報告書. 青森市. pp. 121-130.
- 笹森耕二 2007. 青森県白神岳でのホンデオコジョの記録. 青森自然誌研究, 12: 52.
- Sato, M. and K. Maeda 2003. First record of *Vespertilio murinus* Linnaeus, 1758 (Vespertilionidae, Chiroptera) from Japan. 東洋蝙蝠研究所紀要, 3: 10-14.
- 関 哲朗 1992. 岩木山の哺乳類. 青森県立黒石高等学校研究紀要, 3: 16-33.
- 下泉重吉 1970. 津軽半島の哺乳動物. 津軽半島・岩木山自然公園学術報告. 日本自然保護協会. pp. 41-47.
- 津軽ダム工事事務所 2009. 津軽ダムの環境保全措置—その2 世界初 コビナガコウモリ集団移転 (最終移転). 津軽ダムだより, 121: 2-3.
- 和田干蔵 1937. 青森県産哺乳類目録. 青森博物研究会会報, 5: 1-11.
- 和田干蔵 1939. 青森県博物総目録有脊椎動物編. 青森博物研究会会報, 8/9: 1-28.
- 山本輝正・佐藤顕義・勝田節子 2008. 長野県におけるコヤマコウモリ *Nyctalus furvus* とクビワコウモリ *Eptesicus japonensis* の記録. 哺乳類科学, 48(2): 277-280.
- 読売新聞社 1989. 十和田市正法寺の脚のミイラ、ニホンオオカミだった. 1989年4月23日付読売新聞青森県版記事.
- 吉行瑞子 1974. 本州からオオアブラコウモリ発見される. 国立科学博物館ニュース (1974年11月20日号), 6. 国立科学博物館友の会.
- 吉行瑞子 1989. ニホンオオカミを鑑定する. どうぶつと動物園, 41(9): 32.
- 吉行瑞子・木村帝一 1975. 本州におけるクロオオアブラコウモリ *Pipistrellus savii velox* OGNEV, 1927 の新記録. 哺乳動物学雑誌, 6(3): 142-143.